

日本語・中国語・英語母語話者における事態参与者焦点化の決定要因の差異

The differences among Japanese, Chinese and English native speakers of determining factors that influence which participants are focused on when describing an event

伊 藤 創 *

Hajime ITOH

Abstract

In this study, I conducted a research in which Japanese, Chinese and English native speakers described events on 27 pictures and their descriptions were categorized according to which participant of the event they focused on. The results shows that English speakers tend to focus on (= choose as a subject) the participant in the event who is regarded as the starting point of the Action Chain, whereas Chinese and Japanese speakers focus relatively less on participants at the starting point but instead choose participants at the second point of the Action Chain as a focal point. I explain these differences in terms of the most important determining factor that causes them to focus on one participant out of the event. In English, “agentivity” is the most important factor, whilst in Chinese and Japanese languages, in that order, the importance of “closeness” of the participant increases. This hypothesis matches a lot with the recent studies claiming that in the Japanese language, subjective description is preferred, whereas in the English language, objective description is preferred.

キーワード：主観的・客観的事態把握, 共感度, 動作主性, アクション・チェーン

I はじめに

池上1981¹⁾ から特に注目を集めることになった日本語は主観的な事態把握 (subjective construal) に基づいた描写を好み, 英語は客観的な事態把握 (objective construal) に基づいた描写を好むという指摘については, 詳細については様々な議論がなされてはいるものの, その基本的な主張については, 多くの研究がその有効性を支持, あるいは軌を一にしているものと思われる (森田 1989²⁾, 金谷2004³⁾, 中村 2004⁴⁾, 守屋2010⁵⁾ など)。

日本語で好まれるとされる主観的な事態把握とは, 「自らの身をその事態の中に置くというスタ

* 関西国際大学英語教育学科

ンス（池上・上原・本多 2005⁶⁾: 514)」で事態を捉えることであり、一方、英語で好まれる客観的な事態把握とは、「自らの身をその事態の外に置くというスタンス（同: 514）」による事態把握をいう。

この区別は、言語によってどちらかに限定されるというものではなく、一つの言語内において、いずれの事態把握に基づく言語表現も可能であり、また、その主観性・客観性には段階性も認められる。例えば、以下の3つの言語表現は、(1a) から (1c) という順で主観性の度合いが高まっている（客観性の度合いが低くなっている）が、英語という一つの言語の中でこれらどの表現を用いることも可能である（Langacker 1990⁷⁾）。

- (1) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
 b. Vanessa is sitting across the table from me.
 c. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990: 17ff.)

(1a) の Vanessa は、事態を捉える主体（＝話者自身）なのであるが、その話者とは切り離された存在であるかのように、すなわち「客体化」された形で描かれており、三つの中では最も客観性の高い捉え方に基づいた表現といえる。(1b) においても、やはり話者は客体化されて描かれているが、その客体化の程度は話者を「me」とする（話者が概念化の対象と同一であることを示す）ことで少し弱められている。しかし両者は、話者は事態を捉える主体であると同時に、捉えられる事態の一部（＝対象）でもあるという点で共通している。より平易な言い方をすれば、自らを含めて、全ての参加者を俯瞰的に外から捉えている表現なのである。一方、(1c) では、話者は Vanessa の位置を示す参照点であるにも関わらず、言語表現としては現れない。話者は完全に背景化され、その目から見える知覚内容のみが概念化・言語化されており、三つの中では最も主観性の高い捉え方に基づいた表現といえる。

日本語においても、上記のような客観性の高い表現から低い表現までいずれも可能である（e.g. 「私の前の席に座っていた男性が声をかけてきた」「前の席に座っていた男性が声をかけてきた」）が、その使用頻度を比べた場合、英語では (1a) (1b) のような客観的な事態把握に基づいた表現が好まれ（＝頻度が高く）、日本語では (1c) のように主観的な事態把握に基づいた表現が好まれる。この指摘の重要性は、各言語には好まれる表現の「型」が存在するという言語レベルでの現象を捉えただけでなく、それを事態把握のあり方という言語表現に先立つ認識のレベルに押し上げたことにある。これはすなわち、認識にも好まれる「型」が存在することである^{注1}。このことによって、様々な言語表現・現象（の言語間の違い）にも同じ事態把握のあり方という観点から統一的な説明を与えられる可能性が示されたのである。以下に、いくつかその例を見たい。

(2) ～ (4) に示すように、同じような事態を描いた表現であっても言語間では様々な違いが見られるのは周知のごとくである。例えば (2) では、従属節の述語が英語では過去形（「came」）であるのに対し、日本語では非過去形（「出てくる」）であったり、(3) でも、同じく従属節の事態が、英語では能動形で描かれている（「made a lot of noise」）のに対し、日本語では受動態で表現されていたりする（「騒がれる」）。また (2) ～ (4) のいずれにおいても、主節の表す事態の行為の主体が、英語では「I」「me」という形式で明記されるのに対して、日本語では示されて

いない。

- (2) a. By the time food came, I got drunk.
 b. 食べ物が出てくる前に、酔っぱらってしまった。
- (3) a. My neighbor made a lot of noise all night, so I couldn't sleep at all.
 b. 隣で一晩中騒がれて、一睡もできなかった。
- (4) a. Nobody's here except me.
 b. (ここには) 誰もいません。(池上2006⁸⁾:163)

こうした様々な違いを、事態を外から眺める客観的な事態把握を好む英語、事態に入り込んだ主観的な事態把握を好む日本語という観点から見れば、例えば、(2a)において、英語母語話者が過去形で従属節の事態を描き、一方、日本語ではそれを非過去形で描くことについては、英語母語話者は、当該の出来事を発話時点から切り離し、過去の出来事として客観的に捉えているために過去形を用い、一方、日本語母語話者は、過去の出来事であっても、その事態に経験者として入り込み、酔っぱらってしまった時点、すなわち料理が出てくる前の時点に視点を設定しているゆえに非過去形を用いる、と説明を与えることができる(樋口2001⁹⁾参照)。同様に、(3)においても、従属節の事態が、英語では能動態、日本語では受動態で表現されるのは、英語では、〈隣人が騒いだ〉という事態と、〈私が眠れなかった〉という事態を、事態の参与者である〈私〉の目から離れて客観的に捉えるゆえに、両事態を別個の事態として述べる表現が好まれ、一方の日本語では、事態を経験している者の視点から捉えるために、〈それによって影響を被った〉ことを表す表現が好まれることの反映である、と説明を与えることができるのである。あるいは、(4b)では、主体が表現されていないが、これは、話者が事態の中に入り込んで〈私〉の視点から事態を捉えている(従って自らの姿は見えない)からであり、一方、事態の経験者である〈私〉から離れ、その事態を俯瞰的に眺めている英語の(4b)においては、〈私〉の姿は見えているので、〈主体〉は明記されることになる((2b)(3b)において話者が言語化されていないことも同様の理由として説明することが可能)。

このように、時制(tense)、あるいは相(aspect)形式の違い、態(voice)の違い、概念主体(話者)の言語的明示の有無といった、個別に扱われてきた言語間の表現方法の違いは、各言語話者によって好まれる事態把握のあり方が異なるという認識レベルの特性の違いから、統一的に説明される可能性があるのである。

ただし、筆者は、このような(言語間における)言語表現の違いを事態把握のあり方という認識のレベルの違いに帰する分析の一部には懐疑的であり、言語表現の違いは、部分的には、あくまで当該言語の言語的特徴によるものである可能性を指摘している(伊藤2015¹⁰⁾)。というのも、確かに英語では言語表現のあり方から判断すれば事態を客観的に捉えているように思われ、逆に、日本語は主観的事態把握をしているように見える、のは事実ではあるが、それらはあくまで、言語表現からの推論に過ぎないのであって、本当に認識のレベルで、客観的・主観的という事態把握のあり方の違いがあるのかについては言語の分析からでは完全には検証できないからである。

ただし、その一方で、明らかに主観的あるいは客観的事態把握に基づいた(ように見える)言語表現の使用比率に言語間で大きな差があるとすれば、その影響が認識のレベルに全く影響を与

えないということも考えにくい。その意味では、日本語において明らかに主観的に事態を捉えているような表現が多用されるのであれば、(それが言語的な特性による結果であっても)、やはり、それは日本語母語話者を主観的な事態把握のほうに傾けるきっかけになることは十分考えられる(そしてそれが主観的な事態把握に基づくような言語表現の産出を促すことも当然考えうる)。

日本語母語話者は事態把握のあり方が主観的であるために主観的な言語表現を多用するのか、日本語では主観的な表現が多用されるために、日本語母語話者は主観的な事態把握に傾くようになるのか(＝認識が先か、言語表現が先か)は、鶏が先か卵か先かという議論になってしまうのだが、少なくとも、主観的な言語表現を多用する日本語母語話者は、本当に認識のレベルでも主観的な事態把握を行っているのか、という言語表現からの事態把握の推測には、もう少し厳密な形でその検証を行うことは可能であろうと思われる。

というのも、これまでの言語表現の違いから事態把握のあり方を明らかにしようという(あるいは言語表現の違いを事態把握のあり方から説明しようとする)分析の多くは、日英語の対訳の分析、あるいはコーパスデータから特定の表現形式の多寡の比較に基づいており(Yamamoto 2006¹¹⁾、徐2011¹²⁾など参照)、実際に話者がある事態を捉えた際の、そのリアルタイムの事態把握のあり方を十分に捉えきれない可能性があるからである。対訳された各表現、あるいはコーパスデータから抽出された各表現には、それぞれ当該の表現が属するストーリーの流れがあるわけであって、そのテキスト性・一貫性(菴2007¹³⁾)などを保つ必要があり、実際の一瞬一瞬の事態の捉え方がそのまま反映されているとは限らないのである(例えば、場面が変わっても、以前の主語、主題を保ったまま次の発話・描写に進まねばならない)。

II 調査

1. 調査の概要

そこで、本研究では、言語現象の観察から(認識のレベルでの)事態把握のあり方を検証することには限界があることを認めながら、しかし、可能な限り文脈などの要素を省いた形で話者のリアルタイムでの事態把握のあり方(の言語間の違い)に迫ることを目的に、異なる言語話者に対して画像の描写を用いた調査を行った。単独の調査によって、事態把握のあり方が主観的か客観的か、を直接検証することなど到底できうことではないが、本調査は、事態把握のあり方の中でも特に、話者が事態のどこに焦点をあてて捉えるのか、そこに母語によって違いがあるか、という点に考察の焦点を絞って、主観的・客観的事態把握という傾向差を論じる材料としたい。

調査の前提となるのは、〈主語〉として描かれる参加者は事態の中で最も際立っていると認知されているものである^{注2}というLangacker(1991)以降、認知言語学の中では広く指示されている分析である(尾谷2001¹⁴⁾、谷口2005¹⁵⁾、森山2005¹⁶⁾、小野寺2008¹⁷⁾など参照)。この前提のもとに、話者が〈主語〉として表現する参加者から、その事態のどこに焦点を当てているのかを特定し、そこに言語による違いがみられるかを検証する。

本調査では、以下の図1-1のような、事態を引き起こす側の参加者(Action chainの始点：これを本稿では「Agent」と呼ぶ。図1-1で言えば、〈鮫〉にあたる)と、それによって影響を受ける参加者(Action chainの2番目：これを「Patient」と呼ぶ^{注3})。図1-1では、〈人〉にあたる)が存在する画像27枚を用意した(画像27枚はすべて、どちらの参加者に焦点をあててもお

かしくないと考えられるものを選択した^{注4}。それらを日本語・中国語・英語の各母語話者に提示し、その内容をそれぞれの母語で描写してもらった。被験者は、日本語母語話者62名、英語母語話者54名、中国語母語話者56名の計172名である。

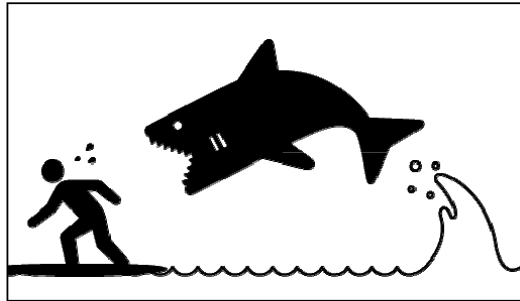


図1-1

次に、その描写の内容を、1) Agent を主語として描いているもの (= Agent に焦点を当てて描いているもの: 「Agent focus」), 2) Patient を主語として描いているもの (= Patient のほうに焦点を当てて描いているもの: 「Patient focus 1」), 3) Patient を主語とし (= Patient のほうに焦点を当てて描いているもの: 「Patient focus 2」と呼ぶ), 4) その他 (「others」), という四つに分類した。(d) のように、参与者に焦点があると思われるが、どちらに焦点が当たっているか判断しにくいもの、(5e) のように、そもそも参与者に焦点があたっているか判別しにくいもの、などはすべて「others」として分類した。以下に図1-1についての、各分類の描写の例を示す (英語、中国語については others の例は割愛)。

- (5) a. サメが人間を食べようとしています。(Agent focus)
- b. サーフィン中にサメと遭遇してしまった。(Patient focus 1)
- c. おとこのひとがサメに食われそうになっている。(Patient focus 2)
- d. 襲ってくる鯊と逃げる人。(others)
- e. まさかの展開。(others)
- (6) a. A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore. (Agent focus)
- b. The surfer tries to flee as fast as he can. (Patient focus 1)
- c. A guy's about to get eaten by a shark. (Patient focus 2)
- (7) a. 鯊魚 咬 人。(Agent focus)
 Shark attack Man
- b. 在 船上 躲 鯊魚。(Patient focus 1)
 on boat escape shark
- c. 被 鯊魚 追。(Patient focus 2)
 passive shark chase

これらの分類をすべての描写について行い、それぞれのタイプの描写がどの程度の割合を占める

か (others にあたるものは除外), またその割合の言語間での違いが有意なものであるか, カイ二乗検定を行った。例えば, 上記の図1-1については, 以下になる。

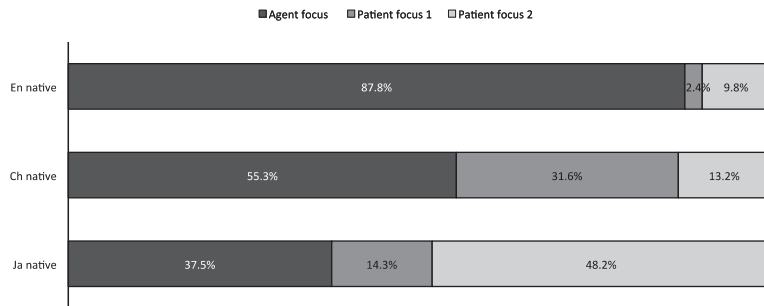


図1-2 ($\chi^2(4)=38.037, p<0.01$)

図1-1については, 英語母語話者は圧倒的に〈鮫〉に焦点をあてた Agent focus の描写が多いのに対し, 日本語母語話者は, 〈人〉に焦点をあてた Patient focus 1, Patient focus 2の描写が多い。また中国語母語話者はちょうどその中間くらいで, 〈鮫〉, 〈人〉に焦点を当てた描写がほぼ同じくらい存在する。

今回の調査で用いた27枚の画像のうち, 各言語の描写のタイプの割合の差が有意であると判断されたものは, 18枚 (66.7%) であるが, 非常に興味深いことに, その多くが, 図1-2と同じような割合を示した。以下にそれらを図とともに示す (紙面の都合上, 各分類の典型的な例文を英語のみで示すことにする)。

2. 調査の結果

2.1. 《Human → Human》

以下に示す図2-1, 図3-1, 図4-1は, 図1-1と同じく, 牛, ゾンビ, 強風といった〈人でない存在〉の行為が, 〈人〉に対して向けられていると捉えられる事象構造 (Event Structure) を持っている (以降, このような事象構造を《Human → Human》と表記する)。

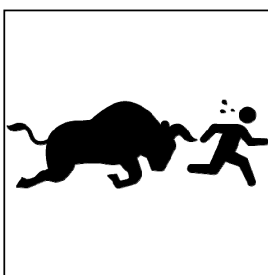


図2-1

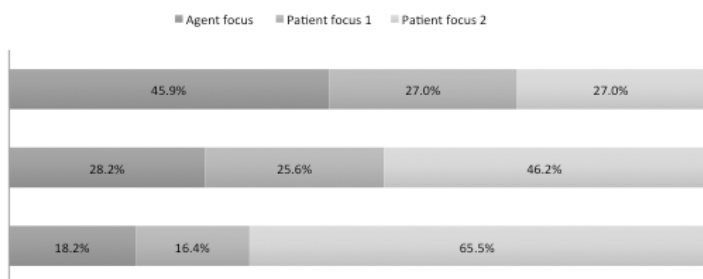


図2-2 ($\chi^2(4)=14.103, p<0.1$)

- (8) a. A bull is chasing a man. (Agent focus)
 b. A man is running away from a bison. (Patient focus 1)
 c. A man is being chased by a bull. (Patient focus 2)

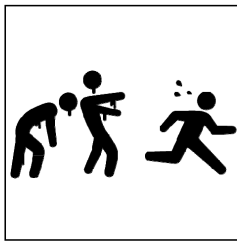


図 3 - 1

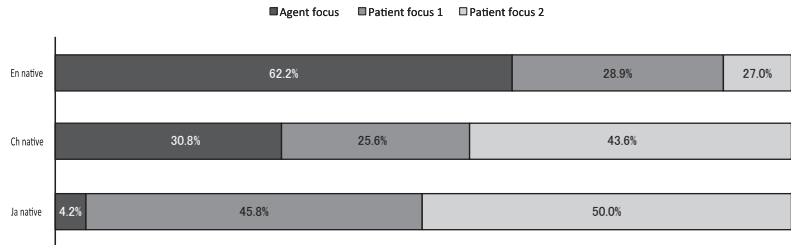


図 3 - 2 ($\chi^2(4)=40.717, p<0.01$)

- (9) a. Zombies are trying to catch a man. (Agent focus)
 b. Someone is running away from zombies. (Patient focus 1)
 c. A man is being chased by zombies. (Patient focus 2)



図 4 - 1

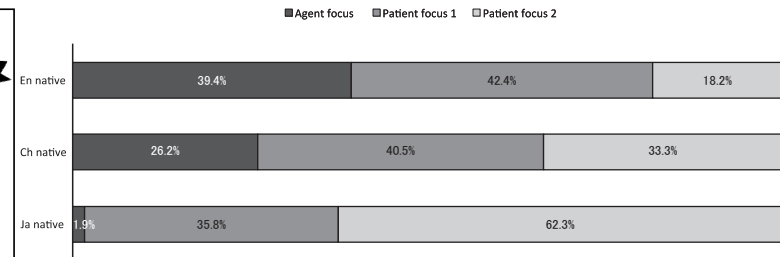


図 4 - 2 ($\chi^2(4)=26.853, p<0.01$)

- (10) a. The wind blew his umbrella away. (Agent focus)
 b. A man holds an umbrella on a windy day. (Patient focus 1)
 c. A man's umbrella has been blown away by a strong wind. (Patient focus 2)

英語母語話者においては、これらの事態を Agent focus で描写するものが多く、それに対して、日本語母語話者は〈被動作主〉である〈人〉のほうに焦点をあて、Patient focus のタイプで描写するものが多い。中国語母語話者は、それぞれがほぼ同じくらいの割合で存在する。これらのことから、事態把握という認識レベルにおいても、英語母語話者は、Action Chain の開始点である参与者により焦点を当て事態を捉える傾向があり、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、その action の向かう先である参与者に焦点を当てて事態を捉える傾向が強まると言えるのではないだろうか。この傾向は事態の参与者がいずれも〈人〉であった場合も同じである。次にそれを見たい。

2. 2. 《Human → Human》

以下の図 5 - 1, 図 6 - 1, 図 7 - 1, 図 8 - 1 に描かれている事態は、いずれも〈人〉の行為が〈人〉に対して向けられていると捉えられる事象構造である(同構造を《Human → Human》と表記する)が、これらの画像に関しても英日中の話者の描写の各タイプの比率は、上記と同じような傾向が見られる。すなわち、英語母語話者は、〈動作主〉に焦点を当てた Agent focus の描写が多く、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、Patient focus の描写が多くなるのである。以下に各画像と各母語話者の描写のタイプの割合を、英語の典型的な例文とともに示す。



図 5 - 1

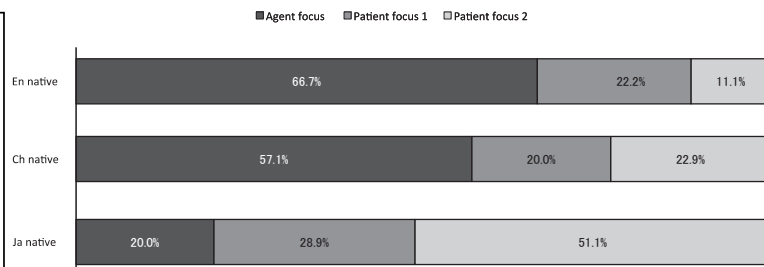


図 5 - 2 ($\chi^2(4)=23.190, p<0.01$)

- (12) a. A boss is yelling at his worker. (Agent focus)
 b. An employee is giving an excuse to boss. (Patient focus 1)
 c. Somebody's just been fired, ... (Patient focus 2)

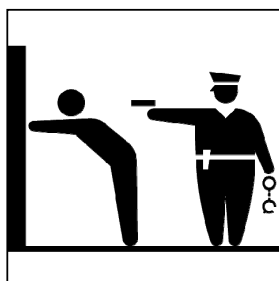


図 6 - 1

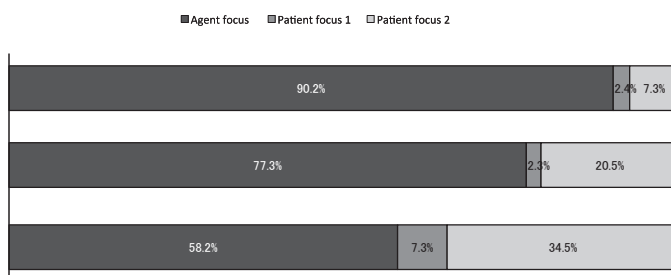


図 6 - 2 ($\chi^2(4)=13.236, p<0.5$)

- (13) a. A fat policeman is holding someone at gunpoint. (Agent focus)
 b. A person under arrest. (Patient focus 1)
 c. Purported criminal is being arrested. (Patient focus 2)

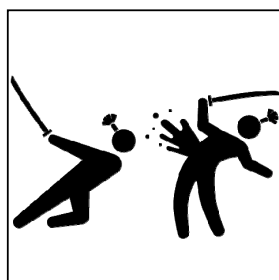


図 7 - 1

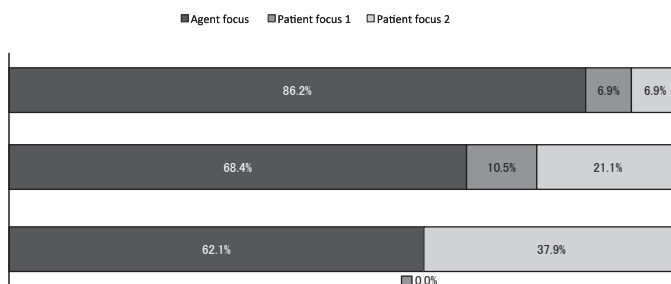
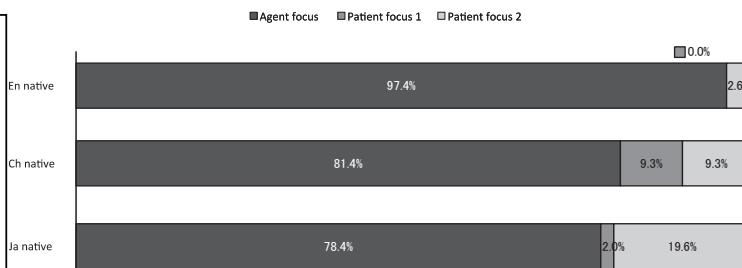


図 7 - 2 ($\chi^2(4)=10.271, p<0.5$)

- (14) a. One samurai has just slashed another one in the side. (Agent focus)
 b. Someone just lost a sword fight. (Patient focus 1)
 c. One guy got cut wide open in the stomach. (Patient focus 2)



図 8 - 1

図 8 - 2 ($\chi^2(4)=12.202, p<0.5$)

(15) a. A woman is kicking a man in a suit. (Agent focus)

b. A man gets a kick in the pants from a woman. (Patient focus 1^{注5})

このように《Human → Human》である画像と《Human → Human》である画像のいずれにおいても、英語母語話者においては、Agent focus の描写が最も多く見られ、中国語母語話者、日本語母語話者の順で、Patient focus で描くものが多くなる。両者で異なるのは、前者が後者ほどは、英語母語話者、中国語母語話者、日本語母語話者の描写の割合の違いが大きくなり、中国語・日本語母語話者の Agent focus の割合が増えていることである。

Ⅲ. 考察

これまで見てきた調査の結果と、先述の〈主語〉として描かれる参与者は、事態の中で最も際立っていると認知されているものであるという分析を合わせて考えれば、1) 同件事態を捉える際にも、英語母語話者は、Action Chain の始点である参与者にもっとも認知的な際立ちを感じ(=焦点を当てて捉え)、その傾向は、中国語母語話者、日本語母語話者の順で弱まり、逆に、Action が向かう先の参与者に焦点をあてる傾向が強くなる、ということになる。また、2) この傾向は《Human → Human》という事象構造を持つ事態と、《Human → Human》という事象構造をもつ事態では、前者のほうがより強い。本稿では、この1) 2) の事実から、事態のどの参与者に焦点をあてて事態を捉えるかを決定する要因のうち、どれがより強く機能するかが言語間で異なるという可能性を示唆したい。

複数の参与者が関与するある事態において、どの参与者に焦点をあてるかは当然ながら、単一の要因では決まらない。例えば、(話者以外の)二人の人間が関わる事態を捉えた場合に、片方が自らの身内であり、もう片方が全く親しくない者であった場合には、話者の焦点はより前者に傾くのが通常であろう。しかし、後者が、それまでの話題の中心であったり、あるいは、とても魅力的だと話者が感じたりした場合には、そこにより焦点が当てられることも十分に考えられる。

今回の調査では、一枚一枚異なった画像を見せることで、文脈から切り離し(例えば、それまでにいずれかの参与者が話題であったとか、その参与者を好意的に思っているか否か、といった情報を与えず)、また参与者の際立ちもできるだけ差がない(両方の参与者の遠近や大きさに差がないように、また表情などもない)画像を選択したが、にもかかわらず、言語間でどの参与者に焦点をあてるかに違いが見られた。この言語間の違いとこうした画像の特性から、単純に推測すれば以下の二つの事態把握のあり方を導くことができる(話を分かりやすくするために、対照的

な調査結果を見せた英語母語話者と日本語母語話者について述べる。中国語母語話者は、それぞれの中間的な捉え方をすると考える)。

推測 1 : (相対的に) 英語母語話者は〈人〉に, 日本語母語話者は〈動物〉に焦点をあてやすい。

推測 2 : (相対的に) 英語母語話者は〈動作主〉に, 日本語母語話者は〈被動作主〉に焦点をあてやすい。

= (相対的に) 英語母語話者は〈Action Chain の始点〉である参与者に, 日本語母語話者は〈Action Chain の 2 番目〉にあたる参与者に焦点をあてやすい。

しかし, これらはこのままの形だと, 英語母語話者の事態把握に関しては認知的に自然なものであると言えるが, 日本語母語話者については, 自然なものとは言い難い。〈人〉である話者があえて, 自らと異なる〈動物〉の参与者に焦点をあてる, あるいは, より目立つ^{注6}はずの〈動作主〉, 〈Action Chain の始点〉を避けて, あえて〈被動作主〉, 〈Action Chain の 2 番目〉に焦点をあてるのは不自然と考えられるからである。

しかし, 推測 1 の〈人〉である話者が〈動物〉よりも〈人〉に焦点をあてやすいのは, 自らと〈近い〉存在だからであり, この〈近さ〉が当該の参与者に焦点をあてる一つの要因と考えれば, 日本語母語話者が(あえて, 相対的に認知的に際立ちの低そうな)〈被動作主〉, 〈Action Chain の 2 番目〉に焦点をあてるのは, そこに〈近さ〉を感じるからではないかという推測が成り立つ。例えば, 〈動物〉よりも〈人〉の方が, 〈怖そうな人〉より〈優しい人〉の方が, 〈犯罪者〉より〈被害者〉の方が, それぞれより〈近い〉と感じるであろう。心理的により〈近い〉存在は, そうでない存在に比べて, より共感したり, 同情したりしやすい。このように, より〈近い〉参与者のほうに焦点があてられるのは, 人の認知のあり方として自然なことであると考えられる。

したがって, 英語母語話者は, 参与者が〈動作主〉〈Action Chain の始点〉であることを, 焦点を当てる際のより重要な要因とし, 一方, 日本語母語話者は, 参与者が自らと〈近い〉ことが, そこに焦点をあてる際のより重要な要因となると考えられるのである。

このように考えれば, 図 1-1, 図 2-1, 図 3-1, 図 4-1 のほうが, 図 5-1, 図 6-1, 図 7-1, 図 8-1 に比べて, 英語母語話者と日中語話者との差が前者のほうがより顕著に現れることにも説明が与えられる。前者に現れる鯨や牛といった〈人以外〉の Agent は, 当然, 話者とは異なった存在であり, 心理的な距離が大きく, したがって, 日本語・中国語母語話者にとっては, 焦点を当てる対象になりにくい。逆に, Patient である〈人〉は話者と〈近い〉存在であり, 焦点を当てやすい。このようなことから, 英語母語話者と, 日本語・中国語母語話者での描き方の差が大きくなる。一方, 後者においては Agent は全て〈人〉であり, その意味では, 前者の Agent よりも, より〈近い〉存在である。したがって, 図 1-1, 図 2-1, 図 3-1, 図 4-1 に比べれば, Agent に焦点をあてる動機付けが増し, その分, 英語母語話者と日本語・中国語母語話者での描き方の差が縮まったと考えることができるのである。

IV 結語

以上, 本稿では, 英語・中国語・日本語の各母語話者の事態把握の「型」の中でも特に, どの

参与者により焦点をあてて事態を捉える傾向があるか、に着目し、そこに違いが見られるかを探るべく、各言語の母語話者による様々な画像の描写の調査を行った。調査から明らかになったのは、英語母語話者は、Agent focus で描写を行う傾向が強く、この傾向は、中国語母語話者、日本語母語話者の順で減少し、逆に Patient focus で描くものが多くなるという言語間の傾向差であった。さらに、《Human → Human》の画像と《Human → Human》の画像では、前者のほうが言語間の差異が大きいという事実も明らかになった。これらの事実から、本稿では、言語によって、どの参与者に焦点をあてるか、その選択の要因の重み付けが異なるという可能性を示唆した。すなわち、英語母語話者は、〈動作主〉、〈Action Chain の始点〉と想定されることが当該参与者に焦点を当てる重要な要素であり、一方、中国語母語話者、日本語母語話者にとっては、参与者の〈近さ〉が焦点をあてるための重要な要素となっているということである。

この Agent focus での描写か、Patient focus での描写か、という比較調査はあくまで事態把握のあり方の一つの側面を捉えたものにすぎないが、〈動作主〉であることを重要視する英語と、〈近さ〉を重要視する日本語語、という対比は、冒頭に述べた英語が客観的事態把握を好み、日本語が主観的な事態把握を好む、という主張の中に位置付けることも可能であると思われる。客観的な事態把握においては、話者自身の存在も含めて、事態を俯瞰的な目で捉えるわけで、その中では、物理的な力の働きかけの有無、その方向性など、客観的事実が重要視される。したがって、英語では、〈Action Chain の始点〉であることが最も認知の際立ちを持つことになる。一方、主観的な事態把握においては、話者を事態と切り離さず、話者との関わりの中で事態を捉えるために、その話者と参与者との〈近さ〉は非常に重要な価値を持つことになる。また今回の画像に描かれた事態は、話者自身が参与者とはなっていないものばかりだが、主観的事態把握を好む言語では、そのような状況でも参与者の目線に立った事態把握がなされることが指摘されている（(2b) (3b) が、主語が「私」でなく、第三者でも言えることに注意）。そう考えれば、その事態の中で、話者が自らとより〈近い〉参与者に自らを重ね合わせた形で事態を捉えるのも自然なことと考えられる。実際、興味深いことに、図 1-1 の日本語の描写では、「サメが襲ってきた。」「人食いザメが飛びかかってきました。」など「くる」を用いた描写も少なからず存在し、これらにおいては、襲われている男性の目線から事態を捉えているものと思われる（今回の調査では、これらは統語的な基準に照らして、Agent focus に分類しているが、これらを〈人〉に焦点が当たっていると考え、Patient focus とするならば、今回の英語と日本語の差異はより顕著にでることになる）。

今回の調査では、〈主語〉として描かれる参与者は、事態の中で最も際立っていると認知されているものであるという前提に立ち、その〈主語〉の選択のあり方から、英語・中国語・日本語の各母語話者には、事態把握のあり方に一定の違いが存在するという結論に達したが、今後は、より言語に拠らない調査を用いて、この参与者への焦点の当て方の違いが、本当に認識のレベルのものであるのかを、検証していきたい。

【脚注】

注1 「〈事態把握〉とは、人が言語化に先立って「事態」を各言語の母語話者に応じたやり方で行うと考えられる認知的な営みを指す。言語の話者によって好む仕方が異なるものであり、言語形式の選択にも大きく関わっている（守屋2010：29下線筆者）」

- 注2 従って、〈目的語〉あるいはその他として表現された参与者は、〈主語〉として表現された参与者より相対的に認知的際立ちが低いことになる。
- 注3 「Agent」「Patient」という用語は、本稿においては、前者が〈action chainの始点にあたる参与者〉、後者が〈Action Chainの二番目にあたる参与者〉という意味で用いる。例えば、図1において、「男性が鮫から逃げている」という描写をするものにとっては、「男性」が〈Agent〉なのであるが、そのような意味役割的な意味ではなく、あくまで、描かれている事態の中で action chainの始点にあたる参与者を「Agent」と呼ぶ。意味的に〈Agent〉であるという場合には、〈動作主〉、意味的に〈Patient〉であるという場合には、〈被動作主〉という語を用いることにする。
- 注4 画像の選択には、筆者を含めて3人の研究者があたり、どの参与者に焦点をあてて描いてもおかしくない、と全員の意見が一致したもののみを使用した。
- 注5 この描写は、Patient focus 1か Patient focus 2か、分類に迷う例ではあるがここでは、前者として分類した。いずれにせよ、英語による描写において、Patient focusはこの一件のみであった。
- 注6 ここでは、「認知的に際立つ」ではなく、より狭義の〈派手である〉〈特殊・特異である〉という意味のみを表すために、「目立つ」という用語を用いる。

【引用文献】

- 1) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店, 1981
- 2) 森田良行『日本人の発想、日本語の表現——「私」の立場がことばを決める』中央公論社, 1989
- 3) 金谷武洋『日本語にも主語はなかった』講談社選書メチエ, 2004
- 4) 中村芳久「主観性の言語学—主観性と文法構造・構文」中村芳久（編）『認知文法論 II』大修館, 2004
- 5) 守屋三千代「広告における受益可能表現—〈事態把握〉の観点より—」『創価大学日本語日本文学』21, 19-32頁, 2010
- 6) 池上嘉彦・上原聡・本多啓「Subjective Construal とは何か」『日本認知言語学会論文集』5, 514-557頁, 2005
- 7) Langacker, R. W. "Subjectification" *Cognitive Linguistics* 1, 5-38, 1990
- 8) 池上義彦『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会, 2006
- 9) 樋口万里子「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要, 人間科学篇』九州工業大学14-3, 53-81頁, 2001
- 10) 伊藤創「言語間における事態の描き方の相違についての一考察」『関西国際大学研究紀要』16, 1-12頁, 2015
- 11) Yamamoto, M. *Agency and Impersonality Their Linguistic and Cultural Manifestations*, John Benjamins Pub Co, 2006
- 12) 徐愛紅「〈事態把握〉から見た中日両言語の語り—語順を中心に—」『創価大学日本語日本文学』21, 57-68頁, 2011
- 13) 庵功雄『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版, 2007
- 14) 尾谷晶則「いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて—認知文法の観点から—」『白馬夏期言語学会論集』12, 45-60頁, 2001
- 15) 谷口一美『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房, 2005
- 16) 森山新「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」『平成14～16年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(2)成果報告書』2005
- 17) 小野寺美智子「日英語の受動構文の認知的基盤「事態把握」の観点から」『拓殖大学 語学研究』119, 11-32頁, 2008